

(仮訳)

“ retired leisure

. . . . 引退後の自由時間

That in trim gardens takes his pleasure.”

それは手入れされた庭園を楽しむこと

Milton

ミルトン

“That is the walk, and this is the arbour ;

あれが小径、そしてこれがあずまや ;

That is the garden, this the grove”

あれが庭園、これが木立

George Herbert

ジョージ・ハーバート

これから概観するこの時代は当然のことだが 3 つに区分される。まずチャールズ 1 世の治世、2 番目に共和国時代 [清教徒革命によりチャールズ 1 世が処刑された後]、3 番目に王政復古の時代である。この 3 つの時代におけるガーデニングの発展を見るとそれぞれが際立った特徴を持っている。園芸におけるゆったりとした進歩の潮流は穏やかに流れたが、庭園のデザインは第 3 番目の時代まで大きくは変化しなかった。共和国の時代には果樹園と市場園芸 market gardens の改善に向けての動きが見られ、チャールズ 2 世の治世下 [在位 1660 ~ 85 年] ではガーデニングのあらゆる分野で大いなる先祖返りが目撃された。初期の頃はジェームズ 1 世の時代のガーデニングの単なる延長に過ぎず ; 今まで引用してきた人々、すなわちパーキンソン、ジョンソン、トラDESCANTO 一家はまだ生きており、エリザベス朝とのつながりが形成されていた。サー・ウィリアム・テンブル Sir William Temple [1628 ~ 99 年 政治家・随筆家] とジョン・イーヴリンの名は王政復古時代の庭園の歴史と深く関わっており、彼らは二人とも同じような形でその時代が 17 世紀末の輝かしい庭園の日々であったことを描いている。

これに続く各世代の造園家たちは、先人たちの能力について誠に低い評価を下しており、その一方、自分たちの庭園の素晴らしさは誰にも負ける訳がないなどと思っていた。ホリソンズヘッドはエリザベス朝時代の庭園のようなものはかつて存在していない、との意見を変えなかったが、17 世紀半ばまでにはガーデニングは著しく進化したのでエリザベス朝の初期は原始的な園芸の時代と言っても差支えないと顧みられるようになった。これには誇張の余地があることを大きく割り引いたとしても、事実として残るのは、この時代の作家によって感じ取られるまでに十分な進歩が記されたということである。レイ Rea [John, ~ 1681 年 園芸家] は 1665 年、『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』 *Flora Ceres and Pomona* の「読者に向けて」のページで、この本を出版する理由についてこう述べている。「パーキンソン氏の著書にある心を楽しませる花の庭園について真剣に考え、また私自身のコレクションと私が見たものとを比べた時、彼の本には最近出回っている数多くの立派なものを付け加える必要があると感じました。またそこに示してある多くのものが既に陳腐化しており、すべての立派な庭園には不要な価値のないも

の』。レイは愉楽の庭園について書いているが、ハートリブ Hartlib の書簡 [Samuel~, 1600 頃~1662 年 大知識人 各分野の人々との膨大な書簡が残されている] の中の一人、おそらくダイモック Dymock と思われる人物が、10 年前に種苗園芸 nursery gardening について同じように書いている。

ハートリブはポーランド生まれでチャールズ 1 世の治世の早い時期にイングランドに住みついた。彼は年間 100 ポンドの年金をクロムウェル Cromwell から受け取り、農業の発展に大いに寄与した。彼の書いた『農業の遺産』*Legacy of Husbandry* は、多分クレシー・ダイモック Cressy Dymock、ロバート・チャイルド Robert Child [1613~54 年 医師・農学者]、ガブリエル・プラッツ Gabriel Platts [1600 頃~1644 年 農学者 正しくは Plattes] たちによる農業に関する書簡を集めたものである。彼らは種苗園や果樹園の数を増やすことが大事であると考え、ガーデニングは適切に運営されれば十分採算に合うことを主な根拠として議論を展開した。「ガーデニングは、土地からとんでもない収益をもたらすことから簡単にわかるように土地を素晴らしく改良するよう見えるだろう。その収益とは 1 エーカー当たり 40 シリングから 9 ポンドにもなり、また土地を掘り起こし、耕し、肥料をやれば出費は大きく嵩む・・・にもかかわらず 2 ないし 3 エーカーの土地で自分自身とその家族を養い、作業のための他人を雇っている人がいることを知っている；したがって目を見張るほど収穫が増える必要があり、そうでなければ費用を賄うことができなくなるであろう； - ただ、このような仕事には多くの欠点があると思われるのは、これはイングランドではまだほんの数年の出来事であるため、深く根付いている訳でもなくまた十分に理解されている訳でもないからである。50 年ほど前、イングランドで初めて発明が花開いた頃、ガーデニングのこの技術がイングランドの中で、サンドウィッチとサリー、フラム Fulham その他の場所に広がり始めた」。ハートリブによると、サリーの老人たちは、キャベツ、アブラナの花 coleflowers を植え、カブとニンジンの種を蒔いた「最初の庭師たち」のことを覚えていたと続け；「庭師たちは 1 エーカー当たり 8 ポンド支払ったが郷紳は自分の土地が利用され掘り返されて台無しになるのではないかと心配し満足しなかった・・・イングランドの多くの地域はまったくもって何も知らなくて・・・ガーデニングとか耕作 howing [hoeing 鋤で耕す?] の名前すらほとんど知られていない・・・ガーデニング用具も (ロンドン周辺を除けば) 数が十分でなく安くもない・・・この国にはリンゴ、梨、サクランボ、ブドウ、栗、アーモンドその他の苗木を育てる場所も十分にはなく：郷紳たちは苗木を求めて数 100 マイル離れたロンドンに使いを出す必要があった」。さらに続けてハートリブは、ケント、ロンドン周辺、グロスターシャー州、ヘレフォード、ウースター Worcester には「多くの立派な果樹園」があると言うが、これらの果樹園は彼がその頃からと述べた 50 年のはるか前から存在していたことを我われは知っている。ケントとサリーではプラムは普通「地代の少なからぬ割合の支払い」に充てられたと彼は付け加えている。果樹園の改良に熱心だったのは清教徒派だけではなかった。熱烈な王党派の中にもこの仕事に目覚ましい足跡を残した一族がいた。今日でも、ヘレフォードシャー

州ホウムレイシイ Holme Lacy にはイチイの生垣が沿道に配置された当時と同じ長い緑の園路が見られるが、ここはチャールズ 1 世がネーズビー-Naseby の戦い [1645 年] に敗れた歴史に残る年に、スクードモー-Scudamore 卿 [John~, 1601 ~ 1671 年] のところに滞在した時に歩いた路であるかも知れない。国王の死後もスクードモーは忠誠を尽くし、ロシェル Rochelle のフランス人ユグノーを救うための遠征に参加し、ホウムレイシイに帰ってからは、リンゴの木の植付けと接ぎ木に精を出した。彼は赤筋ピピン Red Streak Pippin を持ち帰り、これを使って最上等のリンゴ酒を作った。アンブローズ・フィリップス Ambrose Philips (1671 - 1749 年) はこの事実をその詩「果実の女神ポモナ」Pomona の中で称えている。彼はマスクリンゴ Musk apple を誉め、そして次に： -

(仮訳)

<p>“Yet let her to the Red-streak yield, that once Was of the sylvan kind, uncivilized, Of no regard, 'till Scudamore's skilful hand, Improv'd her, and by courtly discipline Taught her the savage nature to forget - Hence called the Scudamorean plant, whose wine Whoever tastes, let him with grateful heart Respect that ancient loyal house.”</p>	<p>だがそれを赤筋リンゴとし、それは昔 森にあったもので、洗練されておらず 見向きもされず、スクードモーの巧みな手腕が それを改良するまでは、そして上品な礼儀作法で それに残酷な自然を忘れることを教え 故にスクードモーの植物と呼ばれ、その酒を 味わう人は誰も、感謝の心で その古き忠実な館を敬うことになる</p>
--	---

ホウムレイシイの果樹園は今もその姿を残し、その庭園にはわが国で一番を競う美しい「コルドン仕立て」の果樹 cordon fruit [1 本の幹から横に広がる剪定法] の壁が今もある。ウォルター・ブライス Walter Blith [1605 ~ 54 年 農業関係の著作家] は 1649 年発行『イングランドの改良者あるいは農業新概観』*The English Improver, or a New Survey of Husbandry* の著者であり、かつ自らそう名乗っていたように、「発明愛好家」でもあった。彼は同胞の人々に対し果樹を植えることを強く訴え、イングランドの他の地方の人々に対してイングランド西部で行われていることを真似するよう、また「ブドウ、プラム、サクランボ、梨およびリンゴ」を植えることを促した。彼はまた「キャベツ、ニンジン、タマネギ、パースニップ、アーティチョーク、カブをもっと植えること」を勧めた。

これらの人たちが途を開き、他の農学者たちがこの良い手本に従い、その著作の中で産業としての市場型ガーデニング market-gardening に刺激を与えようと試みた。ラルフ・オースティンは 1653 年に果樹に関する論文を書き、ハートリブにそれを献呈した。彼の著作の最初の部分は、ガーデニングと果樹栽培を支持する議論がたくさん展開されているが、それは聖書の権威に基づき、かつ聖書の一節がちりばめられている、当時の典型的なピューリタンのスタイルと言える。彼の別の著書『果樹園または果樹の庭園の宗教的活用』*The Spiritual use of an Orchard or Garden of Fruit Trees* では、このスタイルが過剰なまでに推し進められ、ガーデニングに関する情報がほとんど見られないほどであるが、接

ぎ木、移植などすべての手順がキリスト教徒の人生におけるいずれかの場面と比較されている。このピューリタンの精神はアダム（別名アドルフアス）・スピード Adam (Adolphus) Speed [活動時期 1647~59年] が 1659 年に書いた本の『エデンの園から追放されたアダム』 *Adam out of Eden* という書名にも見てとれるし、書名が書かれた扉のページの残りの部分にはこれらの作家たちの実用的な側面が示されている。それはこのようなものである： - 「その他多くのものの中でも、年間 200 ポンドの地代から、すべての費用は控除して毎年 2000 ポンドの利益まで、というラビによる土地改良を示している。」しかし、立ち入る必要もないことだが、どのようにしたらこのような芸当が実行可能になるのだろうか！

共和国の時代には、ガーデニングはより実用的な点から取り扱われた。何を栽培したら一番儲かるか、が考えられた。そしてどうしたら土壌を一番改良できるか、そしてより収穫が上がるであろうかと。設置された庭園は多くはなく、また既存の庭園は戦争中に被害に遭い、特に王室庭園はひどい目に遭った。ノンサッチとウィンブルドンは売られ、ハンプトンコートは売るための調査が 1653 年に行われたが、「議会が次の通知を出すまでそのままに」との命令が出され、手つかずのまま残された。大規模な新しい庭園が造られなかったことは、王政復古の後、設置されたと思われる数と比べるとより浮き彫りになる。

この中間の時期における進歩というものは、経済的な植物の栽培については見られたが、庭園のデザインとかフラワーガーデンについては進歩は見られなかった。植物に関する古くからの多くの迷信が明らかにされた。オースティンは昔ながらの考えを否定するために数ページを埋め尽くし、たとえば桃とかアーモンドの種に字を書いてそれを植えるとその木の熟した果実に同じ字が現れるのを待つというような話を、「間違い発見」と彼は書いた： - 「種のあるすべての果物を、あなたが美味しいと思う味にするためには、なって欲しい味のする酒に種を漬ける」とか「赤いリンゴを作るためにはカワカマス pikes の血に接ぎ木を浸しておく」。これらの方法を彼は次のようにまとめて： - 「こんなことは不可能だ」。「実用上の間違い」を直すことをあわせて追求した彼は、果樹の植付け、移植 moving に関し、大変優れた考えを示した： - 「多くの人が果樹を冬ないしは春近くに移植するがその作業は 9 月ないしはその頃に行うべきである」。もう一つの間違いは「木の植付けの時、木の間隔が近すぎる：リンゴの木、梨の木は 10 から 12 ヤードが適切な間隔であり、サクランボ、プラムの場合は 7 から 8 ヤードである」。多くの人は「果樹園に古すぎる木」を植えるし、「また移植する前の場所と同じかそれより良い土壌の場所に植えることに気を遣わないで忘れる」。オースティンはこのような本に、こういう間違いが書かれていることがわかったと何冊かの本の名前を挙げている。「1640 年の『田舎暮らしの人のレクリエーション』 *The Countryman's Recreation* にはこのような絵空事が満載されている」とか「ディディマス」と自称したトーマス・ヒルの本、およびガブリエル・ブラッツの『田舎の農場』 *The Country Farm* の著作の中にも見受けられる。このような間違いを論破する必要があったということは、とりもなおさず多くの庭仕事をする人たちの考

えというものが、まだどれほど未熟であったかを示すものである。 フランシス・ドロップ Francis Drope [1629? ~ 71 年 樹木栽培専門家] が 1672 年に書いた果樹に関するちょっとした本には非合理的なことは書かれていないが；アダム・スピードがオースティンの本より数年後に書いた本は、オースティンにより「発見された」間違いと同じくらい見るからに馬鹿げた間違いだらけであり、このことから「暗闇から夜明け」までの道のりはゆっくりしたものであったことがわかる。それを示す実例としてはスピードの厳粛なる主張を 2 つ引用するだけで十分であろう： - 「白いユリを赤くするには、ユリの根に穴を開けて何でもいいから赤色のものを詰めること」および「[黄色い花をつける] エニシダ broom の間にバラの根を植えれば黄色のバラが咲くであろう」。彼はノゲシ sow thistles を植えるべきと勧めているが、それは「子牛、子羊、豚 pigs・・・何百万ものウサギ」を「ノゲシが養う」からであり、キクイモ Jerusalem Artichokes は「家禽と家畜化された豚 swine の餌になる」からである。ただし、彼の意見の中には、少しはまともなものもある：たとえば、ジャガイモについて「ジャガイモから上質なパン、ケーキ、それとパイができるであろう・・・ほんの少しの労働でできるジャガイモをもっと大量に増産するとよい；ジャガイモは薄く切って、地中に埋めれば、どれも同じように驚くほど成長してどんどん大きくなるであろう」と彼は見ている。

野菜のパイやタルトは珍しいことではなかったようである：マーカム Markham [Gervase~, 1568 頃~1637 年 詩人] は『イングランドの主婦』*The English Housewife* 1637 年、の中で何種類かのレシピを書いており、その一つが「ハウレンソウのタルト」であり、シナモン、バラ香水、砂糖で香り付けされ、もう一つがハウレンソウ、ソレル、パセリ、卵を使うものであった。あわせてこの本の中では各種サラダの長いリストが示されており、「料理サラダ」として、たとえば「茹でたニンジン」、ダイコン、ムカゴニンジン； - 「シンプルなサラダ、タマネギ、レタス、サムファイア samphire、豆のさや Beanecods、アスパラガス sparagus、またはキュウリ」、これらはオイル・酢・砂糖とともに供される；そして「盛り合わせサラダ」、これは「普通は大きな祝宴や王侯の食卓に出されるもので；」その中身は「初めに若芽とハーブの取り合わせ knots of herbs」、たとえば「赤セージ、ミント、レタス、スミレ、マリーゴールド [キンセンカ]、ハウレンソウ」・・・ほかに「キュウリ、カラント、オレンジ、レモン、オリーブ、イチジク、アーモンドと合わせたキャベツ」。ニンジン料理を飾るために使われ、「楯、紋章、鳥や動物」の形にカットされた。マーカムのお薦めは、ラムとマトンの料理の付け合わせはブルーネカカラント、魚料理にはバーベリー、とするものである（*バーベリー 1 ポンドの支払い価格は 1618 年時点では 3 シリング - ル・ストレンジ『家計簿』）。

果樹の様々な種類の数量については、前の章でいくつかの事例を紹介したところだが、その中から、オースティンは一番良いものを選んでる。リンゴについて彼のお薦めは、夏および冬のパーメイン、小さいピピン、ハーヴェイ the Harvey、クイーンそしてギロフラワー the Gilloflour である。400 から 500 種類ある梨については、「ウィンザー」と「サ

マーベルガモット」Sommer Bergamot を彼は選んでいる。「しかし、コンスタントに実がなる点からはキャサリン梨ほど良いものはないと思う」； - 「グリーンフィールドは優れており・・・いつも変わらずに良い、たくさん実がなる」； - 「チョーク梨、ペリーの特別な種類とされるが、食べるにはまったく不向き」。「フランダースチェリーはここイングランドでは広く植えられている。ブラックハートチェリーは大変特別な果物である」。「一番良いネクタリンはローマンレッドである。ただしこれを繁殖させるのはとても難しい。それは接ぎ木しようとしてもどの木も受け付けず、ほんのわずかだけ植付けられるからで、これが我々にとってこの木がすべての植物の中で最も貴重なものとなっている理由であると思われる」；「ナツメグとニューイングトン Newington の一番素晴らしい桃；とても大きく立派な果物である」。「ここで熟れるイチジクとしては一種類しか知らない：キャサリン梨と同じくらい大きい大ブルーイチジク the great Blew-fig である。この木はオックスフォードのいろいろな箇所の庭園で育っており、南側の壁に向かって植えられ、釘と革紐 Leathers で横に広げられている」。オースティンは果樹に関する当時の最大の権威者であった*。

*果樹に関する優れた論文の写本は、おそらくジョシュア・チャンドラーJoshua Chandler により 1651 年頃書かれたもので、完全にオースティンに依拠するものであり、その一部はオースティンの著作より翻案されたものである。なお、聖書に関する彼の言及は省かれている。この写本は Miss Willmott の所有である。

容赦のない人間の手によりイングランドの古い庭園が破壊されたが、これは時の流れ、季節の移り変わりによる変化よりもはるかに大きかった。もっとも、それぞれの時期の庭園の面影は今も残されている。17 世紀の終わりにかけて再び造られるようになった「王侯らしい」庭園というものは、17 世紀中頃には一つも造られなかったが、多くの古い荘園領主の館の庭園がこの頃から造られることになった。本書は「庭園」の歴史の本ではないから、イングランドの隅々に現存する美しい古い庭園の完全なリストのようなものを提供することは不可能であり、いくつかの典型的な事例を紹介することにより、各世紀ごとの流行や計画の説明に役立てることで満足するしかない。ケントのチルハム城 Chilham Castle の庭園には、テラス、ボウリング用芝生、刈り込まれた木があり、1631 年に造られた。ウォリックシャー州ビルトン Bilton の庭園には、見事なセイヨウヒイラギとイチイの生垣があり、1623 年に創始された。ノーサンプトンシャー州のブルウィック Bulwick には、階段状の坂道、池、そして立派な錬鉄製の門があり、同じ頃造園工事中であり、1674 年に完成した。またノーサンバランドのミットフォード Mitford では、荘園の館（1637 年）自体は廃墟になっているが、庭園の古い壁は絡み合ったバラ、甘いハーブ、そして古いリングの木、あっと言う間の 250 年間忠実に時を刻んできた日時計を今に至るまで囲い込んでいる。このような実例はイングランドのどの地域にも見つけることができるであろう。



BULWICK.

[図 9-1] ブルウィック

家計簿によりこのような庭園の管理方法について垣間見ることができる。ハンスタントン
所在のル・ストレンジ家の興味深い一連の家計簿には、次のような項目が記載されてい
る： -

「1628年11月6日、果物を家に持って帰る袋に1シリング。ボウリング用グラウンドのフラッグを掘る作
業をした男に4シリング。庭園の扉に使う65フィートのオークの板に7シリング。

1629年、Heacham 果樹園の dikinging と生垣作りへの支払い、2人の男を7日間、1単位?7ペンス、
庭園の清掃と穴掘りに11シリング8ペンス [訳注：140ペンス、2人×7日=日当10ペンス]

1630年、手押し車6台に1ポンド、庭園の館の棟飾りに1つ2シリング8ペンスで1ポンド18シリ
ング、堀の壁の棟飾りに16ペンスで12ポンド2シリング5ペンス、庭園の入口の小部屋に30ペンス、
そのドアの上の棟飾り

1631年10月16日、庭園用鋤3シリング

1632年、庭師に4半期分の賃金、2週間分未払いで2ポンド

1635年、庭園用の大きな籠2つ4シリング

1637年、庭園用のポンプとパイプ2ポンド4シリング。Creakeの庭師に挿し木と種の代金2シリング」

ハンスタントンの家計簿をさらに大変興味深くしていることは、そこに記載されている
堀の内側にある庭園の一部は、その当時よりほとんど手が加えられていないということだ
ある。ボウリング用芝生は今もそこにあり、館の正面にある、分厚い低い生垣がある庭園
の四角い一画はほとんど昔のままである。ケントのバラム Barham のヘンリー・オクセン
デン Henry Oxenden [1609~70年 詩人]の筆記帳には1638年から1668年までの(**The*
Genealogist, 1891年7月および10月 - 1892年1月)興味深いガーデニングに関する記載が多数
なされている： -

「1635年2月11日、Maydekenの庭園にタイマイ梨 hawksbill pares を植える。

「1635年 great Maydeken のサクランボ園に植樹。

「1652年2月14日、Barling氏にリンゴの木4本と梨の木、すなわちジャコウ梨 musk parel 本あげる。

「1652年2月10日、いとこのヘンリー・オクセンデンにイチイの木を送る・・・そして彼に stone
rowle を貸す。

「1647年11月16日、庭園に25本の梨の木を植える。庭園は壁で囲まれており、Great Maydeken にて
私の息子のトーマスとホバートが確認。

「1654年11月、Maydekenの種苗場からマルメロの木1本、ウォーデン梨の木2本、その他の梨の木3
本をBytonに植付け、そして梨の木1本をパン焼き場の窓に向かって植え、さらにセイヨウカリンの木1
本とナツメグ桃の木を庭園に植えた。

「1655年2月19日、一番優れた梨である Capt. Meriwether を South Barham の館の脇にある木の上に
接ぎ木した；その上で交配させ made a crosse；これは2月に食べられることになる。

「1639年、彼(Sir Basil Dexivell at Boome)はホールへの後ろのドアに向いている果樹園に植えた。

「1647年2月7日、Hobday中尉がリンゴの木10本を彼の庭園の横の果樹園に植えたが、それは私があ

げたものであった。

「1665年、Ed. Adyの未亡人であるMs. Adieは庭園とグリーンコートの上に笠石 coped the wall を新しく乗せた。



[図 9-2] ハンスタントン

サー・トーマス・ハンマー Sir Thomas Hanmer [1677 ~ 1746 年 下院議長] の筆記帳*にはこの当時の彼のベティスフィールドの庭園にあった果樹についてのメモが残されている： -

* 「フリントシャーにおける教区とハンマー家の回想録」 ジョン・ハンマー卿 - 自家出版 1877 年

A memorial of the Parish and Family of Hanmer in Flintshire, by John Lord Hanmer

「南側の壁に向かってレイ氏（『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ボモナ』の著者）からもらったアプリコット 1 本、ロンドンから到来のアプリコット 3 本、フランス産種の桃 1 本、ベティ

スフィールド 1660 で育てられたもの、トレヴァリン Trevallyn 産のサクランボ red-heart cherries 2 本が植えられている。芝生の園路の隣の隅にはボウエンからもらったベルガモットと思われる梨の木 1 本がある。そこの西側の壁に向かっては、南側の壁からドアへと、ジェフリー大佐からもらったすべてのプラム、二重咲のサクランボ 1 本を除いて、ドアの隣にモロッコプラム 1 本がある；ドアの反対側には、最初のところに bullen プラム、次いでトルコプラム、そしてキングプラム、そしてカタロニアプラム、そしてデュークチェリー Duke cherry [甘いサクランボとすっぱいサクランボの交配種]、セイヨウサンシュユ cornelian。北側の壁に向かっては、トレヴァリン産プラム、すなわちアプリコットプラムとオレンジ、そしてジェフリー大佐からもらったプラム 1 本が植えられている。大庭園の東側の壁に向かっては、サクランボ、カーネーションチェリーが壁の真ん中あたりに、デュークチェリーは端に、北側の壁の近くには、レイからもらったセイヨウサンシュユがほどよく混ぜ合わせられ、そしてレイからもらったトルコプラム・・・小さい庭にはベイト氏からの桃の木 3 本、すなわち Morills・・・ニューイントン・・・そしてペルシャ桃がある・・・小さな庭園の東側の壁に向かっては、南側の壁から始まって、まず 3 本の桃、ベティスフィールド 1660 で育てられたもの、フランス産種から、そして peach de Pau、そしてサボイピーチがある。」

これらの小さな細々したことが面白くないということはない。これらは情熱的な騎士党員 Cavalier [チャールズ 1 世時代王党派] である一人の人間が、あの混乱した時代を生き抜く中で、どのようにして庭園に向き合ったかを示しており、それは王政復古に至るまで動きがなく待つだけの年月をやり過ごすためのものであった。彼がガーデニングに取り組んだのは単なる時間つぶしではなく、真剣に能力と時間をつぎ込み、庭園技術を完全にマスターしようとしたことは、そのペンによる詳しいノートを見れば明らかだ。もう一人の王党派でガーデニングの偉大なパトロンとして知られるカペル卿 Lord Capel [Arthur~, 1631 ~ 83 年] は、1648 年に処刑されたカペル卿 [1608 ~ 49 年? 王党派支持] の息子である。彼は 1661 年にエセックス伯爵を授けられ、1683 年にロンドン塔で死んだ。彼はカシオベリ Cassiobury に庭園を造り、それは 17 世紀で一番美しい庭園の一つにしばしば数えられている。彼の弟であるサー・ヘンリー・カペル Sir Henry Capel [1638 ~ 96 年] も造園家であり、「フランスから何種類かの果物」*を持ち込んだ。

*スウィッター 『田園の設計』 1718 年 Switzer, *Ichnographia Rustica*

彼はキューに庭園を持っており、そこには「変わったグリーン」があった；それは「ロンドン周辺のものと同じくらいきちんと管理されており」彼の「花や果物は」「中でも一番」であった（+ギブソン 『ロンドン周辺の庭園』 1691 年 Gibson, *Gardens about London* ）。サー・ヘンリーは 1692 年、チュークスベリ Tewkesbury のカペル男爵を授けられ、それゆえ二人とも造園家であったことから、カペル卿に関する様々な事柄に関し混乱らしきものが生じがちになった。エセックス伯爵の方は、自分の庭園の管理の主なところを、有名な造園家で果樹に関する本の著者であるクック Cooke にだけに任せていたようだが、ただ、イーヴ

リンの評するところでは(*イーヴリンの日記 Evelyn's Diary)、「この高貴な伯爵ほど自分の家の周りに熱心に植物を植える人はかつていなかったということで、その家は園路、池、その他の田園的な気品で飾られていた・・・カシオベリの庭園は極めて貴重で、それ以外にはありえないくらいで、優れた技術を持つ芸術家クック氏により見事に管理されていた。彼は技術的な面において、数学の門外漢ではなく、占星術もわかっているようだった」。サー・ヘンリーの方はこのような助力は得ていなかったようであり； - 「彼の庭園にはイングランドで栽培されている中で最上等の果樹が植えられていたが、それは彼が最も熱心でそのことをよく理解していたからである」(+同書)

もう一人の著名な王党派の造園家はジョン・イーヴリンである。彼の森林の樹木に関する偉大な著作は、本当は我われのテーマではない。それは英国学士院(イーヴリンはその創設期の会員)のために書かれたものであり、狩猟場、森、森林地帯に植林する時の実用的な参考になることを念頭に置いており、庭園という狭い範囲を大きく超えるものであった。ただ、庭園についても、次の引用に見られるように、折に触れ述べられている。彼はシーダー cedars の耐寒性を高く評価し、あまり育てられていないことを残念がった。多分これは彼の助言によるものであろうが、1683年にチェルシーの薬用庭園にシーダーが植えられた。トキワガシ *ilex* もまた、彼が耐寒性であることを実証したが、それは、ホワイトホールの王室専用庭園には「かつて80年以上も立派な木が元気に育っており」その一本の名残からわかったものである。「フィリリア *Phillyrea* [モクセイ科の常緑低木]は十分耐寒性があり、そのことで私はどうしてフィリリアの一種 *angustifolia* がケースの中に植えられ、オレンジやレモンの間のストーブの近くに極めて注意深く置かれているのか不思議に思った」。イーヴリンは「4本の丸い」「なめらかに刈り込まれた」フィリリアを持っており、デットフォード Deptford [テムズ川南の地域]のセイズコート Say [e] s Courtにある彼自身の庭園にある」(+ギブソン 『ロンドン周辺の庭園』1691年)。セイヨウシデ Hornbeam の下で、「ハンプトンコートやニューパーク」、「ロチェスター伯爵のとても気持のよい別荘」にある「称賛すべき」生垣に気がついた。「これらの生垣は剪定向きであるが、15から20フィートの高さで揃えておくには・・・4フィートの長さの大鎌を使ってきちんとした状態にしておくことになる。その大鎌はほんの少しだけ鎌の形をしていて長い柄、すなわち真っすぐな棒に固定され、剪定作業をきれいに抄らせるものである」。・・・これらの生垣は「我らのオレンジの木、ギンバイカ *myrtle*、その他の貴重な多年草や外来植物を保護する上で役に立つこと」この上ないものである。月桂樹は同じ目的で広く使われており、イーヴリンは「生垣を作ることだけに宿命づけられているようにさえ見える」と言う。セイヨウヒイラギのことも庭園の生垣として彼は熱っぽく称賛する： - 「この世におよそ長さ480フィート、高さ9フィート、幅5フィートの鉄壁の生垣以上に栄光に満ち気分を爽やかにさせるものが存在するであろうか。セイズコートにある(モスクワ大公国皇帝のおかげで)今は荒れ果てた私の庭園の中に、年中棘のあるつやつやした葉っぱのこの生垣をお見せすることができる」。これは『森林樹木』*Sylva*の重版からの引

用で、庭園の「荒れ果てた」という意味は、ピョートル大帝 Peter the Great [在位 1682～1725 年] がイングランドを訪問した時 (1698 年) デットフォードに近いセイズコートに滞在した時に与えた被害のことを指している。言い伝えによると、大帝は面白がって後先を考えず手押し車で庭園中、ボーダーを越え生垣の中を走り回ったという。1698 年 6 月 8 日の彼の日記にイーヴリンはこう書いている： - 「私は、この 3 か月間大帝が私の家を宮廷として使った結果、私の家がどれほど悲惨なことになっているかを見るためにデットフォードに行った。私は国王鑑定士であるサー・クリストファー・レン Sir Christr. Wren [1632～1723 年 建築家 セントポール大聖堂などの設計] と彼の庭師であるロンドン氏にそこに行ってもらい修理の見積もりをしたところ、彼らは大蔵卿に 150 ポンドとの報告を提出した。」

イーヴリンは自分自身の庭園についての関心だけではなく、ほかの庭園の設計も手助けした。サリーのウォットン Wotton にあるイーヴリン一家の居所は「イングランドで手に入る最も壮麗なものの一つであり、確かにその後大いに流行した優美さの実例の一つとなっていた」と彼は言っている。しかしながら、彼は 1652 年、彼の兄弟がいろいろ手を加えるのを手伝った。イーヴリンのような優れた造園家に対する大いなる敬意を持ちつつも、時間が経った今の時点から見ると、彼が加えた変更がはたして全部、改善と言えるかどうかは疑わしいと言っても差し支えなからう。そこには「高台」や「山」があり、そして館の庭の内側には堀があった。その部分は「山を掘り崩しそれを速い流れに放り込み・・・堀を埋め尽くし、その立派な場所を平らにして今は庭園と噴水がある」。1658 年、彼は「オルバリー Alburie (Albury、ギルドフォードの近く) に庭園の進捗状況を見に」行ったが、「私の設計と計画どおり正確に進んでいることを確認した。そこには狩猟地の山を通して長さ 30 パーチ [1 パーチ=約 5m] の地下道があり、このようなパウスリップ Pausilippe [ナポリ近くの古代ローマ地下道トンネル] のようなものは、ここのほかイングランドのどこにもない。水路は今掘られておりブドウ畑が植えられている」。この変わった丘の切通しは、昔施された造作の名残やとても美しいイチイの生垣とともに、今も存在している。イーヴリンは、彼の日記からの抜粋にあるように、ここでもまた生垣にはセイヨウヒイラギを、と熱心に唱えていることを自ら明らかにしている： - 「1672 年 9 月 25 日、私はジョン・バークレー卿 Lord John Berkeleys [1602～78 年 王党派] の屋敷で食事・・・それは彼の新しい館というか宮殿であった・・・ほかには前方の中庭は上品で、馬小屋も同様で、特に庭園は、土地の起伏と愛らしい水浴池のおかげで比較しようもなく上品であった。テラスのセイヨウヒイラギの生垣は私が植えることを勧めたものである。」焼け落ちたバークレーハウスは、今はハイヒル、バークレースクエアおよびランズダウンハウスの敷地となっている場所に建っていた。

イーヴリン自身も海外から新しい品種の種や植物を手に入れようと努力し、また彼が『森林樹木』の中で主唱した樹木を増やそうとした；なぜならプラタナス Plane やセイヨウトチノキ [マロニエ] Horse-chestnut など多くの樹木がこの国ではまだ一般的ではなく、

また中でもカラマツ Larch、ユリノキ Tulip tree、シーダーはほとんど手に入らなかった。1686年、彼がサミュエル・ピープス Samuel Pepys [1633~1703年 海軍大臣 王政復古期の貴重な第一次資料である日記で知られる] に宛てて書いた次の手紙を見れば、その著作*の中で示した彼の強い関心というものがわかる。

*ハクニーのアムハースト夫人所有の写本 Lady Amherst

サミュエル・ピープス宛てのジョン・イーヴリンの手紙、セイズコートより、1686年9月1日付け

ピープス大臣宛て 海軍省 ヨークビルディング

拝啓 先日閣下にお目にかかり食事をご一緒した時、そこにいた艦長（多くの人々の習慣と都市を見てきた人 multorum mores hominum qui vidit et urbes）はニューイングランドにおいて軍隊を指揮することになっておられますが、この方が大変ご親切にも、その地方にある植物の中で珍しくて貴重なものと思われるものを私のために何でも入手してくれる、という私への助力を申し出て下さいました。紳士としての率直さと並々ならぬ勤勉さ：そのことを私は閣下が彼について語った性格から、そして私自身が短時間のうちに観察できたことからわかりました；閣下ご自身の彼に対するご関心とあわせて；この覚書を閣下より彼の手に渡していただける、このような絶好の機会をみすみす逃すようなことはしたくないと思い：植物の王国に自生するこれらの（あるいは別の）ものを収集するという寄り道が、かの地における彼の任務の範囲内であるとするなら：（私を彼にご推薦いただいた最初の方である）閣下より彼に対し、収集したものをご尊名のもとに、送付し、引き渡す許可を与えていただければとお願い申し上げます。 敬具

J. イーヴリン 拝

セイズコート 86年9月2日

[訳注：正しくは qui mores hominum multorum vidit et urbes]

ニューイングランドおよびヴァージニアの植物で以下の名前で知られるもの

ニューイングランド

1. The White Cedar	ヌマヒノキ〔ヒノキ科〕	種だけ
2. Cedar of N: England	ニューイングランド産シーダー	種
3. Larch-tree	カラマツ類	種と苗木
4. Lime-tree	シナノキ類	種と苗木
5. Hemlock-tree	ツガ類	種と苗木
6. Poplar or Tulip tree	ポプラまたはユリノキ	種と苗木
7. Filbert Tree	ハシバミ類	木の実と苗木
8. Firrs of all kinds	あらゆる種類のモミ類	種
9. Pines of all kinds	あらゆる種類のマツ類	木の実
10. Wall Nutts of all kinds	あらゆる種類のクルミ類	木の実
11. Plums of all sorts	あらゆる種類のプラム類	プラム種と苗木

12. Sarsaparilla	サルサパリラ〔ユリ科サルトリイバラ属〕	苗木
13. The Scarlet Nut: Walnut と呼ばれることもバージニア	スカーレットオーク〔ブナ科〕?	木の実と苗木
14. Benjamin Tree	ベンジャミン〔クワ科〕	種と苗木
15. Gumme Tree	ゴムノキ	種と苗木
16. Sugargas Tree	サトウカエデ?	種と苗木
17. Date plum:	マメガキ〔カキノキ科〕	プラム種と苗木
18. Pappaw-tree	ポポーノキ〔バンレイシ科〕	種と苗木
19. Chinquapine	チンカピン栗〔ブナ科 クリ的一种〕	木の実と苗木
20. Piekhickeries	ヒッコリーの一種〔クルミ科〕	木の実と苗木
21. Sumac trees, 3 kinds	ウルシ類 3 種	苗木
22. Cedar of Virginia	エンピツビャクシン〔ヒノキ科〕	種
23. Maple tree bearing keys of crimson color	クリムゾン色の種のカエデの一種	種と苗木
24. Peacock taile tree	オウコチョウ〔マメ科〕?	種と苗木
25. Oakes, 6 kinds	オーク 6 種	ドングリと苗木

種は紙に包むのが最上の保存方法：名前をその上に書き、箱に入れる。植物の実は乾いた砂の入った樽 Barills の中に入れ：品種ごとに名前を書いた紙に包む。木は根を苔で包み樽に入れる：植物も木も小さいほどよい；さもなくは^{むしろ}筵でくるむのもよいが；樽が一番よく、それと名前入りの各品種に付ける紙のラベルがすべて入るくらいの小さな容器。

送られてくるヴァージニアの植物のほとんどはニューイングランドでも育つであろう：

あなたの大いなるご親切と寛大なお申し出により、(ピープス大臣の表書きと推薦により) このカタログをお預けいたします。 敬具 J. イーヴリン

セイズコート デットフォード近くの
86年9月1日

覚書 このコピーはニコルソン艦長の手に渡された 86年9月3日

1664年イーヴリンは『造園家年鑑』*Kalendarium Hortense* すなわち *Gardeners' Almanac* を発行し、これは大人気のため改訂を重ね、『森林樹木』の最終改訂版とともに、1705年に出版され、その年の末にイーヴリンは亡くなった。そこには植えなくてはいけない花やするべき仕事が毎月ごとに丁寧に書かれている。また花の寒さに対する弱さの比較表も作られ、花が3つに分類されている。すなわち、「最も寒さに耐えられない」もので「まず最初に温室に入れるなり何らかの保護をしなければならない」もの、「第2段階の寒さには耐えられ」、寒さ次第で「温室の中で守られなければならない」もの、第3クラスは「死なないけれど極端に寒い時は最後に温室に入れるか、マットレスとかちょっとしたカバーの下に置いて守ってやる」ものである。何種類かの植物に関する彼の分類はちょっと変わっている。まず最初は、エジプトアカシア *Acacia Aegyptica* (= *A. vera*)、リュ

ウゼツラン *Aloe American* (= *Agave americana*)、そしてハケイトウ *Amaranthus tricolor*、しかしこのリストには、耐寒性の *Styrax Colutea*、別名ボウコウマメ *bladder senna*、および白いライラックが含まれており、一方、オレンジ、レモン、セイヨウキョウチクトウ *oleander*、「キソケイ」*Spanish jasmine* (*J. odoratissimum*) は第 2 番目のクラスに「カルセドニー(玉髄)アイリス」*Suza Iris* (*I. susiana*)、「ヨーロッパシクラメン」*summer purple cyclamen* (*C. europoeum*)、「ヒスパニアジギタリス」*Digitalis Hispan* (*lutea*) とともに分類されている。最後のリストはザクロ *pomegranate*、パイナップルをマルバノヒゴタイサイコ *Eryngium planum*、キバナセツブンソウ *winter aconite* と一緒のクラスに分類している。

レイ Rea の『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』には庭園のおよその大きさが書かれている。その寸法は、ベーコンの「王侯らしい庭園」に比べればはるかに控え目であり、貴族の庭園は 80 平方ヤード [約 64m²、1 平方ヤード = 0.8m²] の果樹園と 30 平方ヤードのフラワーガーデン、「一般の紳士階級は 40 平方ヤードの果樹園と 20 平方ヤードのフラワーガーデンで十分」；周囲の煉瓦壁は 9 フィートの高さ、そして果樹園とフラワーガーデンを隔てる 5 フィートの壁、または煉瓦色に塗装された杭の境界。大きな正方形の花壇は塗装された木の柵か、ツゲまたは小さな樹木用の柵 *pallisades* で囲まれていること」とされた。彼が示すデザインのほとんどが正方形で、T 字か L 字型の花壇があり、それは見る角度にフィットするようにまた庭園の壁に沿って作られ、そしてこれらのボーダーはおよそ 3 ヤードの幅とされた。各花壇の隅には「最上のヨウラクユリ *crown Imperials*、マルタゴンリリー *lilies Martagon* など背の高い花」を植え、「正方形の花壇の真ん中にはシャクヤクの大きな茂み、そしてその周りにはいろいろな種類のシクラメン、(花壇の) そのほかの部分にはラップスイセン、ヒヤシンスなどの花を植えるとよい。直線的な花壇は一番きれいなチューリップに向いており、その様子は記録しておくともよからう。ランタンキュラス類とアネモネにも特別な花壇を用意する必要があり - そのほかには、もっと普通のチューリップ、パイモ *Frittilarias*、球根性アイリスその他すべてのしっかりした根を持つ植物が一面に植えられよう・・・フラワーガーデンの片側の真ん中に格好のよい八角形の夏のあずまやを作ることも忘れてはならないだろう。そこは全体に屋根で覆われ、その屋根には風景その他の装飾がきれいに描かれ、家具としては椅子とテーブルが真ん中に置かれている。このテーブルは喜びや楽しみのためだけのものではなく、チューリップやその他の花の根っこを置くなど数多くの必要な目的のために置かれている。これらの根っこは掘られて、名前が書かれた紙に乾燥するまで載せられ、そして包まれて箱の中にしまわれる。選り抜きの 1 年生植物を育てるため、あるいは多様な種類の新しい品種を育てるためには、毎年温床 *hot bed* を作らなくてはならない。このような庭園は苗圃なしには維持されないであろうし良好な状態で管理されないであろう。それは果樹のストックや花や実生の苗木があって多くの可愛らしい情景が生み出されるのと同じである」。

レイの描写によると、球根、なかんずくチューリップの球根の栽培について、一般の小さな庭園においてどれだけ大きな注意が払われたかがわかる。「チューリップ熱」は最高潮に達し、イングランドではオランダほどのクライマックスには達しなかったものの、チューリップの花は当然のことながら人気が高かった。アウグスブルクで初めて（1559年）チューリップがお目見えして 50 年経って、その花はドイツ、オランダ、イングランドにおいてよく知られ、そして広く栽培された。およそ 7 つのはっきり異なった種類のものが栽培され、そこから際限なく新しい種類が増え続け、新しい色を求める熱狂は造園家たちを夢中にさせた。レイの義理の息子であるサミュエル・ギルバート Samuel Gilbert [~ 1692 年? 聖職者・花卉栽培の著作家] は、彼の著作『花卉栽培者必携便覧』*Florist's vade mecum* (*第 2 版 1683 年) の中でチューリップのための庭園の図面を提案している。花壇は正方形に区切られ、50 までの番号が付けられ、一区画ごとに違った品種のチューリップが植えられるようにしたものである。

チューリップのプレゼントは大変喜ばれたり、友人の間での交換が行われ、そして新しい品種は大切にしまっておかれた。次の注意書きはサー・トーマス・ハンマーのポケットブックに書かれている：「1654 年サー・ジョン・トレバー Sir J. Trevor [1637 頃~1717 年 ウェールズ出身 下院議長] に送られたチューリップは Peruchot1 本、Admiral Enchuysen1 本、私の Angelicas の 1 本、Comissetta1 本、Omen1 本、私の持っている最上の Dianas から 1 本、これらすべてが大変立派な球根を持っており、私の妻が Haulton から送った」 「1655 年ランバート卿 Lord Lambert [1619~83 年 清教徒革命の議会派軍人] に私はローズ [庭師 John Rose のことか] を通じ Agate Hanmer のとても立派な母体となる球根を送った」これはベティスフィールドの自分の庭園で育てているチューリップで、その色は紫がかったグレー、深紅色と白であった。サー・トーマス・ハンマーはその栽培法についてもノートを残している。「9月の満月の頃、約 4 インチ間隔で 4 インチ弱の深さで地中に植える。早咲きのものは春の太陽の熱い日差しがよく当たるような場所に植える。遅咲きの品種については真昼の太陽の日差しがあまり強くない場所に植える。土は野原から取ってきた肥えた土 mold か、木が積んであった場所のもので、4 分の 1 かそれ以上の砂と混ぜる。花壇を作るには、この肥えた土を少なくとも半ヤードの厚みとする。チューリップはそれだけを植えた方がよく育つが、ちょっとくらのアネモネなら花壇の外側に、土を高く丸く盛り上げれば、一緒に植えることもできよう。チューリップは 12 月と 1 月には芽を出し、早咲きのものは 3 月下旬、4 月上旬に花が咲き、そのほかはその 2 週間後かその後には咲く。母体となる球根は単独で植え、若い子どもの球根はそれだけで別に植える。チューリップの新しい品種は種を蒔いて作るが、種からできた実生のものは花が咲くまで最低 5 年かかるであろう。古くて強い球根は種を採るため保存しておくが、そのような品種としてはたとえば、青い花卉のものと紫のチャイブ風、また純白の縞の入ったもの、そして淡紅色、紫がかったグレー、桑の実色のもの。青い花卉または底の単色のものと紫のチャイブ風はほとんどのものが縞入りになり、球根が古い場合は 2 年間移植しないで植えたままにして

おくのがよからう」

1660年当時のベティスフィールドのフラワーガーデンにある花のカタログをさらに見ていくと、そのほとんどがチューリップのリストである。花壇の一つ一つについて言及されており、球根が植えられている各列が別々に取り上げられ、各球根の名前が、13もの種類に丁寧に並べられている。そのほかの花についても居場所はあるが、そのための花壇というものは用意されていない。これはベティスフィールドにおける別の花壇の話であるが、「この花壇の真ん中に二重のヨウラクユリが1本ある。端にはレイ Rea が種から育てたアイリスの列が6列ある； - そしてポリアンサス *polyanthuses* とラップスイセン *daffodils* も。この2番目の花壇の4つの隅にはきれいなアネモネの球根が4つ植えられている」。1つの隅にはスイセン *Narcissus* の大群があり、それはすべて「*Belle du Val narcissi*、全部黄色」・・・「*Belle Selmane narcissi*、とても愛おしいもの」などなどと説明されている。「大庭園の南壁の下のボーダー花壇はきれいなアネモネが一杯咲いており、ジャコウバラ *musk-rose* の近くにはレイからもらったコンスタンチノーブルのラップスイセンの球根2つとマルタゴンリリー類 *Martagon pomponium* が植えられている」。これらの抜粋からわかることはトーマス・ハンマーは造園家でかつ作家であるレイと友達だったということである。彼は優良な植物のカタログを作ったが、「とは言え我われの気候に耐えるには」と短く「薬用としての品質について余計なことは言わないで、これらの保存と繁殖のための指示」を出しており、これらの覚書はレイに渡され、レイはそれを自分の本に活用したと信じられている。

サー・トーマスはイーヴリンとも友達であり、彼の植物に関する知識の一部はイーヴリンとも共有された。1668年8月22日、彼はイーヴリンに手紙を書き、何らかの書き物を同封している：「これらはほんの単なる観察に過ぎないが、真実であり、花の改良に関して広く知られる秘密なるものは正しくないことを証明できよう」。1671年には彼は再び手紙を書き、この時はイーヴリンにいくつかの植物を送っている： -

ベティスフィールドにて 1671年8月21日

「拝啓 ここに何種類かの球根をお送りします：アツバサクラソウ (*Auriculas*) とアネモネとラナンキュラス類はとても良いものですが、チューリップは (*Agat Hanmer* と *Ariana*、それといくつかのものを除いて) 特別というほどではありません；本当に、私の庭園には昔持っていたような珍しいチューリップのいろいろな品種というものが今はないので；私の持っていた一番良いものはこの場所に住むようになった最初の年にほとんど枯れてしまい、その後、新しいもので飾ることをしていません。なぜならこの空気も土もそれらに向いていないと思うからです。あなたのフラワーガーデンは、新しいものですが、それほど大きくはないと思いますので、今回はあまりたくさんのは送れません。アツバサクラソウはあなたが受け取る前に乾きすぎないとよいのですが；それらはデットフォードに着く前に最低2週間は経っているでしょうから、できるだけ早く植え替えて

set、3 日間から 4 日間水をたっぷりやって（もし雨が降らないようでしたら）そして日差しが強すぎないところに定植して plant 下さい。私はかつてナデシコの仲間に挑戦してみようと考えたことがあって、2 年前種からそれは見事なものを育てましたが（このようなことは今までやったこともなければまたやろうとも思いません。なぜならイングランドの湿気はオランダやフランダースに比べて種が熟するのを妨げるからです）ロンドン周辺には至るところに優れたものがあるのであなたにあえてご覧いただくほどの自信がありませんでした： - そのような遠くまで送ることで枯らすことにならないかどうか心配しました。イーヴリン様、私としましては、このようなつまらないことか、あるいはもっと重要な場面で一層のお役に立てればと願っております：私は即座に大いなる喜びをもって、私の本当の気持ちをお伝えするあらゆる機会をとらえることを誓います、

あなたの心からの忠実なるしもべであることを

トーマス・ハンマー

「私ども夫婦は謹んで令夫人およびあなたに対し、また私の気高き友人サー・リチャード・ブラウン Sir Richard Browne [1605 頃~1682/83 年 王党派 イーヴリンがセイズコート of 彼の屋敷を購入] に対し私どもにできるお手伝いをいたします。この手紙と箱を私の息子トム・ハンマーの手であなたにお届けします。息子はインナーテンブル法学院 the Inner Temple 内のフィッグツリーコート fig-tree Court の自分の事務室に定期的に通っており、あなたのご指示があればいつでも私に伝えることができます。箱の中にはアツバサクラソウのとても良い種が入れてありますが、あなたの方が種蒔きと育て方について私が申し上げるよりもよくご存じのことと思います。」

ジェラードとパーキンソンによって珍しいとされたそのほかの花は世間一般に幅広く知られるようになった。このことはユリについて明らかだ： - 「赤いユリ [カナダユリなど] red lily (* = *Lilium canadense rubrum*, or *L. croceum* or *L. pompomium*) はひどく派手な vulgar 花なので、国中どの女でも、簡単な説明で、それがどんな花なのか初めての人にもわかります・・・次に来るのがマルタゴンで、つる性で巻きつく花は花瓶に生けるか煙突にしか向いておらず、植えるべき場所はボーダーの横か生垣の下である」(†ギルバート『花卉栽培者必携便覧』)。カーネーションは依然として人気の高い花であった： - 「*Caryophyllus hortensis* 7 月の花と呼ばれ、チューリップが春の誇りであるように、確かに夏の栄光を体現していた・・・もう少し上品なものはオランダの 7 月の花あるいはもっと一般的にはカーネーションと呼ばれ、オランダやその他海に面した地域で種から育てられ、そしてわが国にもたらされたものである」(†同書)。

繊細な植物であるオジギソウ *Planta Mimosa*、傷つきやすく控え目な「植物」はチャールズ 1 世の時代に新しく入手されたものである。種は「毎年アメリカから持って来られた」(§ Rea.)。これはか弱い一年草の一つと言え、このために温床が用意されたようである。もう一つ、これと同じような方法で育てられたのがタバコで、「クリスマスの後、できる

だけ早く温床に種を蒔く」とシャロック Sharrock [Robert~, 1630~84 年 聖職者・植物学者] は書き、「次に南側の壁の下、そうでなければ厳しい天候から守るために生垣のところ、あるいはアシの塀のところに植える」。

最初にタバコのこと英語で書かれたのは 1580 年、『新発見された世界からの楽しいニュース』*Joyful News from the Newfound World* と題された本であり、それはモナルデス Monardus [スペインの医師・植物学者] のスペイン語を J.Frampton が翻訳したものであった。そこには「タバコとその大きな効用」の説明とその植物の版画が載っている。

アステカリリー [アマリリスの仲間] *Jacobaea marina* (= *Sprekelia formosissima*) は北米から 1658 年に持ち込まれた [正しくは *Jacobaea maritima*? 一般的には silver ragwort シロタエギク]、マデイラ諸島 Madeira からのジャスミン (= *odoratissimum*) も同じ頃、そしてその他多くの植物が持ち込まれた。

今日では、展示会、競技、賞金を通じて、あまりにも多くのことが花の改良を推奨するために行われていることから、改良のための努力が昔、自発的に行われていたことを認識することは難しい。花の栽培を奨励する活動（花のプレゼントに対するお礼はもっと早い時からあったので、もちろんこれは除いて）について、私が気づいた中で一番早い記録はパルトニー Pulteney [Richard~, 1730~1801 年 医師・植物学者] が述べたもので（*『植物のスケッチ』1790年 *Sketches of Botany*）、「レイ氏の情報によると、ノリッジの人々は美しい花の栽培、生産に昔から優れており、その当時（1660年頃）花屋さんたちが毎年祭りを開催し、一等賞の花に賞金を贈呈したということである」。

外国のか弱い植物を持ち込んだことで温室 conservatories、暖房温室 hothouses が徐々に発展することにつながった。前の方の章で、冬の間における繊細な植物の保護についてサー・ヒュー・プラットが示したいくつかのヒントについて注目したところだが、1660年初版の彼の本の第 2 部において、彼は保護することを考えるだけでなく、その後長い間発展しなかった技術、促成栽培 forcing についておぼろげながら考えていた。彼は「あえて問うが、もしエンドウ豆 pease、マメ類 beans、カボチャ、マスクメロンその他のマメ類 pulse の種を小さな鉢に入れ・・・穏やかなストーブ温室 stove あるいは火により簡単に暖められる都合のよい場所に置いて、そして 3 月か 4 月に種蒔きすれば、早く芽が出てくるであろうか」と書いた。さらに「どうして植物（すなわちアプリコットやブドウ）を暖かい台所の壁の近くに植えてその火を活用しないのだろうか。あるいは恒常的に火を使っているビール醸造人、diers、石鹼製造業者、砂糖精製業者はその火による蒸気の熱を（このような火はもうまったく見られなくなったが）隣接する果樹を置いておく個人の部屋に簡単に供給することができるであろうになぜ活用しないのだろうか」と書いている。

今やオレンジを育てることに注意が向けられ、これらの樹木を保護するために建てられたハウスは、温室の一番の先駆けと言えるものである。それは近代のガラス構造とはまったくかけ離れた、大きな窓のある大きな部屋のようなもので、極寒の時にはストーブか暖

炉で暖められ、「ストーブや暖炉 raised hearths がない場合は炭火を入れた火皿で温度調節をしなければならなかった」(トレイ 『花の女神フローラ・豊饒の女神ケレス・果実の女神ポモナ』 1665 年, シャロックにも)。オレンジは鉢植えにされ、夏の数カ月は外に持ち出されて庭園を彩ったが、「間もなく温室の中に収容」された。庭園は「選び抜かれた緑のコレクション」なしには庭園とは言えなくなった。チャールズ 1 世の時代に既に果樹園はいくつか存在していた。ウインブルドンはその一番見事なものの一つで、ヘンリエッタ・マリア王妃のお気に入りのリゾートであった。



[図 9-3] オランジェリーと運河 ユーストン

エドモンド・プリドー Edmond Prideaux のスケッチより 1716 年頃*

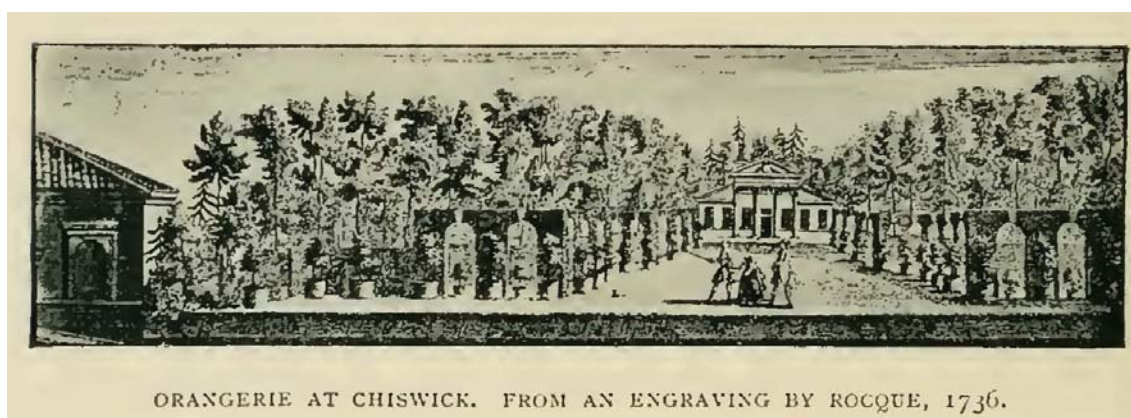
*チャールズ・グリン・プリドー・ブルン氏 Charles Glynn Prideaux Brune, Esq. 所蔵

オレンジ庭園は「4つの結び目」で構成され、それはツゲで囲われ、周りを歩けるような芝生地が作られた。この中に容器に植えられたオレンジが夏にはずっと立ち、そして果樹園の中には、冬に 42 本の木をしまっておくガーデンハウスが作られていた。議会がこの

場所を売る前に調査した時、これらの木は 420 ポンドと鑑定された。これらの土地の調査により、当時の庭園に関する完璧な姿を知ることができ、様々なテラス、樹木、散策路、夏のあずまやその他すべてそこにあるものは丁寧に書き留められ鑑定された*。

* 『考古学』 *Archæologia* 第 10 巻所収 1789 年。本書の補遺に、公文書館にある写本のオリジナルを復刻。議会調査報告 No. 72

王政復古の後、温室はさらに一般化し、当時の作家の中にはそれに注目する者も何人かいた。「か弱い植物」を受け入れるためにオックスフォードの植物園にハウスが建てられ、後にチェルシー薬草園にも建てられた。 ストランド通りのエセックスハウスの庭園には「最上の植物」の素晴らしいコレクションがあり、当時最も名高かった庭師の一人、ジョン・ローズ John Rose がその世話をしていた。ケースに入れられた植物を彼がどう取り扱ったかについては、レイがこのように引用している： - 「春と秋にはケースから土の一部を取り出し、残りをまた鍬など適当な道具で掘り起こし・・・また肥えた土と十分腐らせた堆肥化した糞を 2 の割合で埋め戻さなければならない。」



[図 9-4] チズウィックのオランジェリー

ロック Rocque による版画より 1736 年

このような状況ではあったが、オレンジの木は当時でもまだ大変珍しいものと考えられたことは、ピープスの日記 *Pepys' Diary* の次のような抜粋から見てとれよう： - 「1666 年 6 月 25 日、ペン夫人がハックニーの 2 つの庭園（私が日に日にますます好きになっているもの）に我われを案内してくれた。ドレイク氏のものは、庭園はなかなかで、また館と眺め prospect も称賛に値するものであった。もう一つはブルック卿 Lord Brooke [Robert Greville, 1607 ~ 43 年 過激な清教徒活動家] のもので庭園は格段に素晴らしかったが、館は良いとは言えず、眺めは全然良くなかった。しかし、庭園は素晴らしく、ここで私は初めてオレンジが育っているのを見た。オレンジの果実は緑のもの、半分緑、4 分の 1 緑、そして完全に熟れているものが同じ木になっており、同じ木に実がなるのは毎年だったり 2 年

ごとだったりする；私は小さな実をこっそりもぎ取り（とてつもなくこの果実に好奇心があった者として）そして食べたが、その味はほかの小さな緑のオレンジとまったく同じで - その大きさは私の小指の先の半分であった。ここにはほかにも外来の植物が何種類もあって、迷路もいくつか、また可愛らしい鳥の檻もあった」。彼は前にもこの庭園に来る機会があり、1654年5月8日この庭園についてこう言っている： - 「イングランドにおいて最も上品で称賛される庭園の一つである」。ただし、オレンジはその時そこになかったのか、あるいは彼が見なかったのかどうか、オレンジのことは書かれていない。

造園家たちは一定量の空気が植物の生存のために必要であるということは理解していたようだが、光の力についてはまったく気がついていなかったように思える。 シャロックは、このテーマについて書いて、次のような結論に達した。「外の冷たくてピリッとした空気により・・・新鮮な緑が生まれる」、これを証明するために、彼はたとえば花を部屋の中に閉じ込めると、葉の色が薄くなり、「アーティチョーク、エンダイブ Endive、チコリ Mirrhis Cichory、アレクサンダーズ Alexander などの植物の葉が白くなる現象は、これらの植物を温かい所に置いて、冷たい空気が入ってきたり感じられないようにすることで現れた」。不思議に思われることは、冬の間中、繊細な植物を暗い場所で保護していて、どうやってその植物を生かしておくことができたのかということである。「人によっては、マートル [ギンバイカ] Mirtles、ザクロなどの弱い植物を、ミツバチの巣のように麦藁でハウスを作ったり、板（太陽光が差し込む窓があったり、なかったりするが）で作ったりして守った。馬小屋の敷き藁がとても寒い天気のために保護するためにハウスの周りに置かれた」。

ル・ノートル Le Nôtre [André~, 1613~1700年 フランスの造園家 ヴェルサイユ宮殿などを設計] がチャールズ 2 世によりイングランドに招かれ、その招請を受け入れた彼のデザインと監督のもと、セントジェームズパークが造成され、同様にハンプトンコートとホワイトホールの改良も行われたと広く信じられている。 1661年、エイドリアン・メイ Adrian May とかいう者が王室勅許状 Royal Warrant により「ホワイトホール、セントジェームズパーク、ハンプトンコートで雇われているフランス人庭師の監督者として請求書の検査等を行い、また彼らがしかるべく満足しているかどうか見るため」に任命された。これにより、フランス人たち、ル・ノートル自身ほど大物でないにしろ、ペロー Perrault とか彼の弟子とかが雇用されていたことが事実であることを示している。スウィツァー Switzer [Stephen~, 1682~1745年 造園家 風景式庭園の初期主唱者] は 1718年にペローがイングランドを訪問したことに言及しているが、ル・ノートルが来たことは一言も言っていない。ジャン・ドウ・ラ・カンティーニ Jean de la Quintinye [1626~88年 ルイ 14 世の植物学者] は偉大なフランス人造園家であるとともに果物栽培者であり、彼は確かにイングランドを訪問し、流行を追い庭園の愛好家である上流階級の主要なイングランド人、その主たる庭園設計者はル・ノートルであったが、彼らに助言し、書簡の交換をしていた。イーヴリン、ロンドン、ワイズにより翻訳された彼の著作は、イングランドにおいては極めて標準的な

本とされ、挿し木や剪定の仕方に関する彼の説明図は称賛に値するものである。ローズは実技の面では当時随一の庭師と考えられており、エセックス伯爵は彼をヴェルサイユで勉強させるために派遣し、帰国後チャールズ 2 世により王室庭師 Royal Gardner に任命された。このようにしてイングランドではフランスの影響を強く受け、貴族が所有する最も大きな邸宅の豪勢な庭園は、古い様式の荘園領主の館の庭園とは違い、フランス風に設計されたのである。

なぜ大きな庭園だけでこのスタイルが採用されたかと言えば、ル・ノートルのような大きな構想を実現するには空間が必要だったからというのが一つのもっともな理由である。樹木は、より長く、より大きく、より大胆な並木道に植えられた。彫像、噴水、人工の滝で飾られた広い散策路とテラスが設けられた。フランスの庭園の絵画のすべてには、たくさんの腰掛と、石造りのあずまやが見られ、その背景には、壁面のくぼみであるアルコーブやアーチの形をした格子垣あるいは剪定された木がある。ハンプトンコートの半円形の庭園もチャールズ 2 世の治世下にル・ノートルの監督のもとに造られた。彼は並木道と水路を設計し、1662 年には「ほぼ完成」していたが、庭園は数年後には何かしら手が加えられた。チャールズ 2 世の時には、Farrelli の手になる、海の精セイレーン syrens と彫像で飾られた大きな中央噴水が存在していたが、ウィリアム 3 世 [在位 1689~1702 年 オレンジ公ウィリアム] の時に 12 の小さな噴水とともに取り除かれた。王政復古になるとすぐ作業は開始されたが、それはヴェルサイユの絢爛豪華を見たばかりのチャールズが新鮮な気分で帰って来た時で、多分ルイ 14 世の壮大さと競うつもりだったのであろう、多額の支出を行った。噴水の間には幾何学模様の花壇と芝生が配置され、その一つ一つの真ん中に円錐状のイチイが植えられた。これらのイチイのいくつかは、もはや窮屈なまでに刈り込まれてはいないが、今も目にすることができる。

ハンプトンコートに手を加える仕事を手伝ったフランス人の庭師の一人がボーモント Beaumont であり、彼はウェストモーランド Westmorland にあるレベンズ Levens の設計をした。もっとも彼がそこでした仕事はル・ノートルのスタイルとは違っていたことは確かである。レベンズには彼の肖像画があり、そこには「ジェームズ 2 世の庭師 M.ボーモントとジェームズ・グレアム大佐 James Grahme」と刻まれている。グレアム大佐はジェームズ 2 世 [在位 1685~88 年] の忠実なる支持者で、1689 年の名誉革命の後、政治的な理由で、北部に住むことが一番安全と考え、最近購入した広大な土地に、ボーモントの監督のもと、庭園を造ったのは彼の時代であったが、その庭園は現在に至るまでほぼ当時の形を変えないでいる。したがって、この庭園は当時のオランダ風庭園の最も完璧な実例を提供している。



LEVENS. FROM A PICTURE BY GEO. S. ELGOOD.

[図 9-5] レベンズ Geo. S. Elgood の絵より

この時代のどの庭園にも明らかに見られた一つの特徴はボウリング用グリーンあるいはレーンで、100年前から流行になっていた。ボウリング遊びは宗教施設の構内においてすら許されていたが、それは修道院が抑圧される前、1593年に書かれたその施設の説明の中に、ボウリング用レーンがダラムの修道院教会の所有である旨の掲示があることからわかる。「右側には、回廊から出て診療所 *Fermery* (or *Infirmary*) の中へ入る時、コモンハウスとその管理者がいて・・・そのコモンハウスには庭園とボウリング用レーンが付属している。それは今述べたハウスの裏手の池の方に向かって作られており、見習い僧たちが時々気晴らしをするためのものであるが、彼らが治療を受けた時、先生は彼らが良くなったかどうか見るために横に立っていた」(*『ダラムの儀式』サーティーズ協会 75 ページ *Rites of Durham*)。レベンズにはベリンガム *Bellingham* の紋章のついたボウルがいくつか今も残っており、グレアム大佐がこの場所を 1687 年にベリンガムから買った時には、その何年から前からこのボウリング用グリーンはあったに違いない。昔のボウリング用グリーンの実例は今もなお数多く残っている： - ケントのチルハム城には誠に見事なものがあり、それは長さ 207 フィート、幅 126 フィートのものである。またヨークシャー州のカスワース *Cusworth* とブラマム *Bramham*、ヘレフォード州のハウムレイシィ、ポウイス城 *Powis Castle* そのほか多くの場所にも良い実例がある。これらの形と大きさは様々で、一般的には小高くされたベンチやテラスが広々とした芝生の片側に作られ、場合によっては別のサイドにも作られ、多くの場合、見物人が試合を見るパビリオンが作られた。一方、ボウリ

ング用レーンは、これとは反対に、覆いかぶさる樹木の陰にすっぽりと隠されていた。ウォリックシャー城にあるボウリング用グリーンは 1673 年にこのように描写されている：

- 「門の内側には・・・立派な中庭があり、その中には淡くこじんまりと優美なボウリング用グリーンが広がり、その周りには月桂樹、モミの木など珍しい木で囲まれている」*。

*トーマス・バスカビルによるポートランド公爵の写本ジャーナル Thomas Baskerville's Journal MSS. of the Duke of Portland, Hist. MSS. Report 13.

また 1681 年、ノリッジ近辺のノーフォーク公爵の庭園についても同じ著者、トーマス・バスカビル Thomas Baskerville [1630~1720 年 地誌作者] によって「水上からこの都市を眺めて楽しもうということで舟に乗ったら、船頭がノーフォーク公爵の美しい庭園へと案内してくれたが、そこには水面に降りるおしゃれな階段があって、私たちはそれを使って庭園へと上がった。そして見事なボウリング用グリーンと何本もの美しい小径を見た」と描かれている。バスカビルが書いたすべての記録には、どのような小さな町でも、彼が滞在した宿屋の多くに付属して、誰でもが使えるパブリックのボウリング用グリーンがあることに注目している。そして、彼の筆によると、ポンテフラクト城について「今では地面から 2 ないし 3 ヤード盛り上げられた壇と壁の根元の台が残るばかりであるが、とは言え、そこが立派なものと思えるのは、見事な庭園とボウリング用グリーンとつながっているからであり、そこでお好みの美味しいワインを飲めるであろう」。またベドフォード Bedford には「昔の城の遺跡があり、その中には美しいボウリング用グリーンがある」。中でも彼が目にするのはサフランウォールデンの「町の外にあるとても立派なボウリング用グリーン」であり、またノーフォークの小さな町ワットン Watton について彼は、「ジョージイン」のところに小さくて特筆に値する、見事な新しいボウリング用グリーンがあると言っている。これらの見事な芝生の区画は庭園の美しさをいやが上にも増大させたに違いなく、また小さな町では公開庭園 a public garden としてまたレクリエーションの場所として活躍したに違いない。

また、どこの庭園にも一つもしくはそれ以上の日時計 sundials が置かれた。それは通常、庭園のデザインの中心をなし、それ自体が庭園にふさわしい飾りであった。日時計は昔の庭園の名残がすべて消し去られた中で、多くのものが破壊を免れて生き残った。ラトランドシャー州 Rutlandshire のエックストン Exton では、昔の日時計が燃え尽きた建物の前に置いてあり、これが以前、窓の前に広がっていた庭園のほとんど唯一の痕跡である。サフォークのユーストン Euston の場合のように、日時計の中には所有者の紋章が針を作る際に使われていたり、一族のモットーが日時計の周囲に刻まれている場合もあったが、これは建設された年代を特定する時に大いに役立つことが多かった†。

†日時計に書かれた説明およびモットーについては、『日時計の本』*The Book of Sundials* 参照, Mrs. Alfred Gatty により収集されたもの, 1872 年

時には、庭園全体が日時計のように設計され、ツゲやイチイで作られ天宮図が植えられた。このようなデザインによる適切な一例がステインバラ Stainborough のウェントワース Wentworth にあり、これは 1732 年に作られ、文字はツゲで、日時計の針はイチイで作られている。オックスフォードとケンブリッジについてのロガン Loggan [David~, 1634~92 年 版画家・画家] の風景画、特にオックスフォードのニューカレッジ、ケンブリッジのクイーンズとペムブルックカレッジの図版の中のものは、このタイプの日時計の優れたデザインを描いている*。

*『ケンブリッジおよびオックスフォード図版集』デイビッド・ロガン 1675 年 *Cantabrigia and Oxonia illustrata*. Dav. Loggan. ここに描かれているツゲとイチイの日時計は、最近レオポルド・ロスチャイルド氏が所有する、Leighton Buzzard 近くのアスコットの庭園に植えられた。



[図 9-6] 日時計 ユーストン アーリントンの紋章付き 1671 年頃

すべての時代を通じて庭師たちが相手するのに大変な苦勞をしてきたのが庭園の有害な小動物を根絶することであった。彼らはモグラどもを抑え込むための仕掛けを工夫することに主に心を砕いてきた。エリザベス女王がティオボルズを訪問した際、そしてパーリー卿が 1591 年 5 月、女王に敬意を表して宮廷仮面劇を準備し、女王の御前で台詞が朗読されたが、その台詞はジョージ・ピール George Peele [1556~96 年 劇作家・詩人] が書いたもので、この庭園を造る過程を描きながら、その美しさを女王の徳になぞらえるものであった。最初の台詞は「モグラ捕り」の台詞で、それはこのように始まる： - 「私は結び目花壇や迷路について語ることはできませんが、私が絶対そうだと思うのは、地面があんなに結び目ばかりなのでそれを見た庭師たちは驚いたということと、たとえ私がそうでなかったとしても、曲がった木 a cammock (* = a crooked tree) から棒を作ることはあの囲い小作地の庭のように簡単であったということです」 †。

† 「R. グリーンおよび G. ピールの演劇と詩の作品」 Dramatic and Poetical Works of R. Greene and G. Peele. ダイス編 By Dyce, 1861 年

普通のモグラ捕りは捕まえたモグラの数により支払いがされ、一般的には「大人のモグラを捕まえると 1 ダース 12 ペンス、若いモグラは 1 ダース 6 ペンス」であった。そしてわざわざモグラ捕りを呼んで家や庭とかににいるモグラを 1 匹捕まえることを人が頼んだ場合、モグラを捕まえたならそれに対し 2 ペンス未満、時には 3 ペンス未満ということはほとんどなかった。と言うのは支払いは捕まえた数に対してだけで、捕まえ損なった時はその損は自分のせいだったからだ († 『ヨークシャーにおける地方経済』 *Rural Economy in Yorkshire*, 1641 年. サーティーズ協会, 1857 年)。イースト・ライディング・オブ・ヨークシャー East Riding of Yorkshire の農民、ヘンリー・ベストはこのような覚書を作っており、モグラ捕りに彼自身が支払った記録を彼も残していた。「1628 年 4 月 28 日、荷車 *carre* の中でモグラを殺処分したことに對しジョン・パーソンへの支払いは、大人のモグラ 1 ダース半で 13½ ペンス、若いモグラ 2 ダースで 6 ペンス」などなど。昔のガーデニングの本には奇妙なモグラの殺し方のいくつかの方法が載っている。シャロックは次のような「モグラに対する対策」を書いている (§ 『ガーデニング技法の改善』 ロバート・シャロック著 第 3 版 1694 年 *An improvement in the Art of Gardening*) :

- 「水を撒けばモグラは溺れる、あるいは狭い所に追い込めば簡単に捕まえることができる。プリズ氏はある春、3 月頃モグラ捕り 1 人とその少年を頼んで、約 10 日間、90 エーカーの土地で、大人、若いのをあわせて 3 ブッシェル [約 100 リットル分] のモグラを捕まえた」。スピード氏の覚書の中にはこんな方法も書いてある：赤いニンシを用意し、細かく切ってモグラ穴の山の上でそれを燃やすか、それともニンニクかネギをモグラ穴の入り口に突っ込んでやるとモグラどもは土から出てくる。私はこれらの方法を試していない

ので、読者は信じるか疑うか、自分自身の方法を試してみて。」

そのほかの庭園の厄介者を退治するため、同じくらい妄想じみた多くの対策が流行した。ローソンは手で全部のイモムシをつまみ上げて「足で踏みつぶす」ことを勧める。「私は自分の木の間を煙がくすぶるのは好きでない」、「不自然な熱は自然の木にとって決して良いことではない」と彼は言う。彼は庭園を「動物ども」から遠ざけておくために必要なことを列挙し、「外の強固なフェンスに加え、立派な足の速いグレーハウンド犬、石弓、鉄砲、そして必要なら、鹿には鉤をつけたリンゴ、野ウサギ用の罠 hare-pipe」、そしてクロウタドリ、ウソなどの小さな鳥に対しては、「一番のここでの対策は石弓、peece である。」庭園概論を書こうとする者は、蜂のことを語らないで済ますことはできないであろう。蜂の巣はどこにでも見つけることができ、その管理をすることは庭師の数ある義務のうち必要なものと考えられており、ガーデニングのテーマについて書く作家は一般的には一章を蜂に充てたものである（*トーマス・ヒル『蜂の正しい飼い方』 *The right ordering of Bees*）。

チャールズ 1 世の時代の記念すべきイベントの一つがイングランドで初めて造られた植物園であり、それは 1632 年オックスフォードに造られた。これはヨーロッパで最初のものがパドバで設立されてからわずか 100 年後のことであった。ダンビー伯爵のヘンリー Henry, Earl of Danby [~Danvers, 1573 ~ 1643 年] が創設し寄付したもので；彼は 5 エーカーの土地を与え、温室も作り、庭師のための建物も建てた。素晴らしい玄関の入口通路はイニゴ・ジョーンズがデザインしたもので、創設者を称える日付と銘文が掲げられていた。ヤコブ・ボーク Jacob Bobart [1599 ~ 1680 年 植物学者] はドイツ人でブランズウィック出身、初めこの責任者であったが、彼の息子、同じくヤコブにより引き継がれた。

湿地帯植物の沼地、これは現在はキューやほかでも見ることができ、「自然庭園」 wild garden の愛好家たちが誉め称えるものであるが、これは何も新しいものではない。ボークはオックスフォードに一つ作り、ロバート・シャロックにより次のように記された（†『ガーデニング技法の改善』第 3 版 1694 年）、「人工的な湿地は固い粘土に穴を掘って、湿地から取ってきた同じような土で埋めることで作られる・・・、ここオックスフォードの庭園ではボークにより作られた人工的な湿地があり、それは湿地帯植物を保存するために、時々水をやることで、自然状態の時と同じように 1 年から 2 年でこれらの植物は成長する。」この庭園のカタログには約 1600 の品種と変種が掲載されており、1648 年にボークにより出版された。このカタログは小さな本であり、花について記載するスペースはない。それは単なる名前リストであり、第 1 部はラテン語 - 英語、第 2 部は英語 - ラテン語となっている。リストには、樹木の仲間としては「モミ fir の一種」Abies mas、英名 male Firretree、「イチゴノキ類 [ツツジ科]」アービュタス Arbutus、英名 Strawberry tree、「セイヨウハナズオウ 別名ユダノキ」Arbor Judae、英名 Judas tree、「セイヨウトネリコ」Ash tree などである。花の仲間としては約 20 種類のバラ、その中には「ヨークとランカスター York and Lancaster、プロバンス Provence、オーストリア Austrian、そしてシナモン Cinnamon、11 種のピオラ violas、9 種のクレマチス、7 種

のコルチカム [イヌサフラン] Colchicum、9種のクロッカス、二重と一重のシャクヤク、4種のジギタリス、10種のセンノウ類 Lychnis、マンテマ類 Campian、ビーオーキッド [オフリス ラン科] Bee orchis、セラピアス類 [ランの一種] orchis serapius」などである。さらにこのリストには「タバコ」Nicotiana、English Tabacca、「ユッカ Yucca, Indian Bread」、「セイヨウイラクサ」Stinging nettle、そして4種類のコケ、「ジョウゴゴケ類 cup、ヒカゲノカズラ類 club、hard sea [未同定]、そしてフロウソウ [コウヤノマンネンゴケの一種] tree mosse」も含まれている*。植物の名前はそれぞれアルファベット順になっており、いかなる分類もされていない。在来種と外来種を区別する最初の試みはウィリアム・ハウ William How により、『英国植物学』*Phythologia Britannica* (1650年) という題名の彼の著作の中でなされた。

*拡張された第2版は、オックスフォードの植物学者であるフィリップ・スティーブンス Philip Stephens とウィリアム・ブラウン William Brown の両者の協力のもと、1658年に出版された。これは第1版を大幅に改良したものであって、ジェラードとパーキンソンへの言及がしばしばなされている。

本書は植物学の進化の歴史を扱うものではないが、リチャード・パルトニーによって立派に成し遂げられた仕事は、1世紀以上も前なのに年代順に正確なものであり、科学がこんなにも密接にガーデニングと結びついていたことを示すものであるから、それに触れないで済むことはできないものである。それは、もし体系的な分類方法がなかったとしたら、現在栽培されている数限りない植物について、どのようにしたら理解、認識できるであろうか？この分野での2人の偉大なパイオニアはジョン・レイ John Ray [1627~1705年 博物学者] とロバート・モリソン Robert Morison [1620~83年 スコットランドの植物学者・分類学者] である。どちらの功績が大きかったかは議論のテーマとなることがあった。二人とも同じ時期に分類体系を作り始めていた。レイは自分の分類の概要について、1668年、ウィルキンズ司教の『真性のすなわち普遍的な文字』*Real or Universal Character*の中の一覧表に示していた。

[訳注：ジョン・ウィルキンズ、1614~72年 聖職者・自然哲学者。ウィルキンズは *An Essay Towards a Real Character and a Philosophical Language* の中で、たとえば、動物 Zi、犬類 Zit、犬 Zita のような分類法を普遍的言語として提案]

モリソンの最初の着想は、1669年の彼の著書、『プロア王立庭園』*Hortus [Regius] Blesensis* の中に組み込まれており、さらに1672年、彼の『セリ科植物分類』*Plantarum Umbelliferarum Distributio* および1680年の『植物の歴史』*History of Plants*†の中で発展していた。

† 『植物の歴史 オックスフォード大学 第2部』*Plantarum Historiæ Universalis Oxoniensis, pars secunda* 第1部は一度も出版されなかった。1680年

レイの著作、『植物の新手法』 *Methodus Plantarum [Nova]* の中で示した彼の全体の分類体系は、1690年に書いた『英国の植物概要』 *Synopsis [Synopsis of British Plants]* の2年後まで表に出ず、1703年に『植物の新手法』の改訂版が出版された。モリソンはその分類体系を完全に自然 Nature を観察して作り出したと明言したが、レイは多分こちらの方が正直だと思うが、カエサルピヌス Caesalpinus [Andreas~, 1524~1603年 イタリア人の医師・植物学者] ほか外国の著作家、さらにはモリソンまで含めて、彼らのおかげであると言っている。単子葉植物と双子葉植物を最初に区別したのはレイであり、これにより現在では普遍的に使われている「自然分類体系」Natural System の基礎を築いた。レイ (1628~1705年) [1627の誤り?] は、エセックスのブレイントゥリー-Braintree 近くの鍛冶屋の息子で；そのグラマースクールで教育を受けて、1644年、ケンブリッジに行き、そこですぐさま自然史、特に植物学の歴史に傾倒し、1660年にはケンブリッジ周辺の植物のカタログを出版した。彼はイングランド中を旅行しまくり、また彼の友人とともに3年間海外留学をした。この友人とはフランシス・ウィラビイ Francis Willoughby [1635~72年] であり、彼もまた自然学者であった。レイは1667年英国学士院 Royal Society の会員になり、その「会報」に多くのものを寄稿した。1679年、彼は自分の生まれ故郷に近い場所に居を定め、そこで残りの人生を書斎で過ごし、自然史と植物学に関する偉大な著作を生み出した。モリソン (1620~1683年) はアバディーン Aberdeen の出身で忠実な王党派であり、戦争が始まった時に彼は軍隊に参加し、国王側の大義が敗北してフランスへ渡った。そこで彼は自然史を学び、大変優れた植物学者になったので、1650年、ブロワ Blois にあるオルレアン公爵の立派な庭園の管理者 Curator に任命された。王政復古の時、チャールズ2世は彼をイングランドに呼び戻し、王室庭園の監督を任せた。1669年オックスフォードの植物学の教授に任命され、医術博士を取得し、そこで講義をするとともに、『植物の歴史』 *Historia Plantarum Oxoniensis* の著述に精魂を傾け、それは1683年に事故で亡くなるまで続いた。これらの二人によって発展した分類体系はそれまでの植物学者のものとは違っていた；それは彼らが初めて植物を果実や花の持つ実際上の外観で分類したことに見られ、生育の習性や場所の類似性だけから分類したものではなかったことによる。モリソンは草本性植物を15に分類したところ；レイは25に、樹木と低木を8つに分類した。これらの分類体系は、ジュシュー-Jussieu [Antonie Laurent de~, 1748~1836年 フランス人植物学者] やロバート・ブラウン Robert Brown [1773~1858年 スコットランドの植物学者] たちのために、言うなれば道筋をつけたようなものであり、それが一番必要とされた時に登場したのであった。東から西から、旧世界から新世界から、植物が年を追うごとに数を増やして流れ込んできており；これらの新しく手に入れた宝物の分類の必要性が植物学者の最優先の仕事であった。